

世界文学全集

9

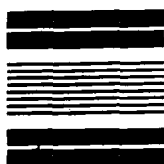
オースティン

高慢と偏見
説きふせられて

阿部知二 訳

河出書房

© 1968



カラー版 世界文学全集 第9巻

オースティン 高慢と偏見 説きふせられて

昭和 43 年 5 月 5 日初版印刷

昭和 43 年 5 月 10 日初版発行

訳 者 阿 部 知 二

装幀者 亀 倉 雄 策

発行者 河 出 朋 久

印刷者 澤 村 嘉 一

印 刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房

定 価 750 円

製 本・加藤製本株式会社

製 函・加藤製函印刷株式会社

本文用紙・三菱製紙株式会社

表 紙・日本クロス工業株式会社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座 東京 10802

目次

オースティン

高慢と偏見	3
説きふせられて	235
年表	403
解説	409

巻頭口絵 ジェイン・オースティン像

（ロンドン、ナショナル・ポートレート・ギャラリー所蔵）

カサンドラ・オースティン筆

本文カラーさし絵

フィリップ・ゴフ

© Macdonald & Co., Ltd 1948

装 幀 亀倉雄策

高慢と偏見

主要人物

ベネット氏 英国西南部ハーフォードノヤの田園ロングザーンに住む地主の中流紳士。

ベネット夫人 ベネット氏の夫人。五人の娘たちに良縁を得て結婚させるのが、彼女の人生最大の事業である。

ジェイン 長女。良識と寛容にとむ、気立てのやさしい美人。二十二歳。舞踏会で金持ちの青年ビンググリーと会い、たがいにつよく心をひかれる。

エリザベス（愛称リジー、イライザ） 次女。才氣にとんだ勝負な性格。ビンググリーの友人ダーシーに関心をもつが、彼の傲慢な態度につよい反感を抱く。

メアリ 三女。

キャスリン（愛称キティ） 四女。

リディア 五女。ウィカムと墮落ちして結婚する。

フィリノプス ベネット夫人の妹婿。メリトンで弁護士をしていた夫人の父親の書記をつとめ、その業務を継いでいる。

サー・ウィリアム・ルーカス ベネット家のしたしい隣人ルーカス家の主。

シャーロット ルーカス家の長女。二十七歳。

マライア 次女。

チャールズ・ビンググリー ベネット家に近いネザフィールド荘に移ってきた富裕な独身の青年。明朗で社交的な好男子。

キャロライン・ビンググリー その妹。ハースト夫人はその姉。

フィノソウィリアム・ダーシー ビンググリーの親友。ダービンのベムハリーの名門の当主。すぐれた知性と気品にとむ好男子だが、無口で気位が高い。

ジョー・アナ ダーシーの妹。

フィッソウィリアム大佐 ダーシーの従兄の軍人。

ジョージ・ウィカム ダーシー家の執事の息子。放蕩もの。

ダーシーと反目しあっている。

ウィリアム・コリンズ ベネット氏の親戚の青年牧師。ベネット家の財産の限嗣相続者。シャーロット・ルーカスと結婚する。

キャスリン・ド・ハーグ夫人 ケント州ハンスフォードのロングズ荘に住む名門の誇り高き未亡人。ダーシーの叔母。

ガードナー氏 ロントンで商業をいとなむベネット夫人の弟。

第一章

独身の男性で財産にもめぐまれているというのであれば、どうしても妻がなければならぬ、というのは、世のすべてがみとめる真理である。

はじめて近所へきたばかりの人であってみれば、彼の気持ちや見解は、ほとんどわかっていないわけだけれども、周囲の家々の人の心には、この真理はかく不動のものとなり、その人は当然、われわれの娘たちのうちのどれかひとりのものになるはず、と考えられるのであった。

「まあ、あなた」とある日ベネット夫人が夫にいった。「ネザフィールド莊園にとうとう借り手がついたってこと、お聞きになって？」

ベネット氏は、聞いていないと答えた。

「でも、そうなのですよ」と彼女は言いかえした。「今しがた、ロングの奥さまがいらして、すっかりそのことを話していました」

ベネット氏は、返事をしなかった。

「どんな人が借り手なのか、聞きたくはありませんの？」と妻はじれったそうに声をあげた。

「あ、あなたは話したいのだろうね。聞くことには異存はありません」
氣を引くには、それで充分だった。

「そりゃあ、あなた、知っておいていただかなけりゃ。ロングの奥さまのお話では、ネザフィールドをお借りになったのは、北イングランドの大財産家の若いかなんですって。月曜日に四頭立ての四輪馬車で下検分にいらしたのですけど、すっかりお氣に召して、その場でモリスさんと話をおきめになったそうですわ。ミカエル祭（九月二十九日、四半支払日）も待たずにおはいりになる予定で、召使たちのだれかれも、来週のおわりまでには住みこむことになるんですって」

「何という名前だろう？」

「ビングリー」

「結婚してるのかね、それとも独身？」

「あら、独身よ、あなた、もちろん！ 財産家で独身よ。年収四、五千ポンド（ポンドは金貨）。願ってもないわ、家の娘たちには！」

「どうして願ってもないのだろうか。それが娘たちにどうだというんだらうか」

「まあ、あなたって人は」と妻は答えた。「なんて手数のかかる人なんでしょう。そのかたが娘たちのひとりと結婚なさることを、わたしが考えていることくらい、わかってくださいな」

「彼がここに住みつくのは、そういう下心があつてのことだったのか」

「下心ですって！ ばからしい。よくもそんな口がきけますのね！ でも、もしかすると、どちらかを愛するようにならなることは、大いにありうるのだから。おいでになったらすくに、あなたに訪問していたかなけりゃ」

「そんなことをする理由は見当たりません。あなたと娘たちとでゆけばいいし、または娘たちだけをやってもいい。そのほうが、たぶんい

いだろうな、というのは、あなたは娘たちと美しさを争っているのだから、ビングリー氏が、みなの中であなたがいちばん好ましいということにもなりかねないから」

「おやおや、お世辞ですことね。それは、わたしもむかしはひとかどきれいだったにはちがいないけど、いまさら取りたてて鼻にかける気もありませんわ。女も一人前になった娘を五人も持つようになつては、自分の美しさなどを気にかけてもいられませんものね」

「そういうばあいには、気にかけても美しさのほうかあやしい、ということもあるようだ」

「とにかくあなた、ビングリーさまが近所にいらしたら、きつとあいきつに行つていただかなくては」

「それは約束しかねるな、ほんとうのところ」

「でも、娘たちのことも考えてください。娘のどちらかのすばらしい縁組になるってことを、ちょっと考えてももらなさい。サー・ウィリアム・ルークスと奥さまとは、たまたまそれだけの理由で、訪問することとにきめていらつしやるわ。ご承知のように、めつたに新しくきた人のところなんか訪ねないんですのね。どうしても、あなたに行つていただかなくては。たつてわたし、ちか訪問するつてわけにもゆきませんわ」

「それは遠慮かすぎるといふものです。ビングリー氏は、あなたかたを大歓迎するにちがいない。わたしが一筆、どの娘を選んで結婚なさろうと異存これなくと書いて、あなたから渡してもらうことにしよう。もつとも、ひとことリジーを賞めておかなくてはなるまいが」

「そんなことは、よしていただきますわ。リジーは、ちつともほかの娘よりすぐれてはいません。ほんとうにあの娘は、ジェインの半分もきれいじゃないし、リディアの半分も愛想がよくないわ。でも、あなたは、いつもひいきするのは、あの子のことね」

「ほかの娘たちは、一人としていたした長所がないね」と彼は答えた。「みんなそこいらの娘たち同様、ばかばかしくて物を知らない。だがリジーは、姉妹たちよりもいさか頭がいいようだ」

「まあ、あなたつたら、自分の子供たちをどうしてそんなふうにくいえますの？ わたしを苦しめてよろこんでいらつしやるのね。わたしの痛みやすい神経に、これっぽちの思いやりも持っていないんだわ」

「それはまちがってるよ、あなた。わたしは、あなたの神経には充分に敬意をはらっているよ。それはわたしの旧友なのだ。少なくともこの二十年間、あなたか神経のことをいたわりながら話すのを聞いてきた」

「ああ、わたしの苦勞がどんなものか、あなたにはわからないんだわ」

「でも、あなたがその苦勞を乗りこえて、年収四千ポンドの青年がたくさんこの近所へやってくるのを見るまで、生きてもらいたいね」

「万一そういう人か二十人くるようなことがあつても、あなたは訪問しようとなさらないのだから、わたしたちには何にもなりませんわ」

「二十人もきたとすれば、まちがいのないところ、わたしはその全部を訪問することになるだろうて」

ベネント氏は、機才、皮肉なユーモア、含蓄、気まぐれなどの一癖ある混合体たつたから、妻に自分の人柄を理解させるには、二十三年間の経験もまだ不十分であつた。一方彼女、心を探りだすのには、それほど困難をとまなわなかつた。彼女は、理解力の弱い知識のせまい、気分の変わりやすい人だつた。何か不満なことがあると、神経が痛むとうつたえた。彼女の人生の事業は、娘たちを結婚させることであり、なぐさめといえ、訪問と世間話とであつた。

第二章

ベネット氏は、もっとも早くビンググリー氏にあいさつに行つたもののひとりだった。前々から訪問するつもりでいたのだったが、妻には、ゆくものかと最後までいいはっていた。それで訪問をしたその日の夕方まで、彼女はそれをすこしも知らなかった。そのときになって、つぎのようにしてそれを明らかにした。二番目の娘か帽子の飾りをつけているのを見て、とつぜん話しかけた――

「ビンググリーさんが気に入ってくれるといいがね、リジー」

「どんなのがビンググリーさまのお気に入るか、わたしたちには知る由もありません」と彼女の母は遺恨をこめていった。「訪問もしないんですから」

「でも、お忘れになつてよ、お母さま」とエリザベス(このエリザベスでは)がいった。「ビンググリーさまには舞踏会でお目にかかることになつていて、そしてロングの奥さまが紹介するつて約束なさつたのじゃなくて」

「ロングの奥さまは、そんなことしないうわ。ご自分の姪めいが二人もあるんだもの。自分勝手な、うわべだけの人だからね、わたしはてんであの人を問題にしないのよ」

「わたしも同じだ」とベネット氏がいった。「あの人の世話を、あなたがたが当てにしないことがわかつて、安心した」

ベネット夫人は、それに返事などしてたまるものか、という心だったが、それでもがまんできなくなつて、娘たちの一人を叱りはじめた。「そんなに咳せきをつづけるのはやめて、キティ(キティはキヤスリンの愛称)、ごしようだから！ 少しはわたしの神経のことも思つてください。神経が引き裂かれそうじゃないの」

「キティは、咳をするととなると遠慮もないようだね」と父はいった。

「時をきらず咳をするね」

「わたし、面白半分て咳をしてるんじゃないやなくてよ」と不満そうにキティが答えた。「このつぎの舞踏会はいつなの、リジー？」

「二週間後の明日よ」

「そう、そうだったわね」と母が声を高めた。「するとロングの奥さまは、その前の日までは帰つていらつしやらないわけになるから、ご自分もあのかたと知り合ひでないのでは、紹介の役をつとめるなんてこと、できっこありません」

「それでは、あなたが友人に得意の場を見せて、ビンググリーさんを、彼女に紹介するといひね」

「そんなことためよ、あなた、だめだわ。わたし自身お近づきになつていないんですもの。どうしてそんなに人をからかうのですか」

「あなたの慎重さは、尊敬に値する。二週間の交際だけというのは、たしかにひどく物足りないね。人がじつさいにどんな人物かは、二週間もたてばわかるというものではない。だか、こちらでそこを踏み切らなければ、だれかほかの人がかそうすることになる。そして、ロング夫人と姪めいごさんたちも、けつきよくは運をためす機会はあるのだから。その場合ロング夫人に親切な行爲と思つてもらえるのだから、あなたが紹介の労をとらないのならば、わたしが自分で引受けよう」

娘たちは、父に目をみはつた。ベネット夫人は、「ばかな、ばかな！」というだけだった。

「たいへんな勢いの捨てぜりふだが、それはどういう意味なのか」と彼はききとがめた。「人を紹介するという形式や、それが重大なものとされていることを、ばからしいとでも考へているのだろうか。その点では、あなたには賛成できないな。メアリーはどう思ふかね。」

あなたはかねて思慮深いお嬢さんだし、すぐれた書物を読んで抜書きなんかもしているのだが」

メアリは、何かひじょうに行きどいたことをいいたかったが、どういっていいかわからなかった。

「メアリが思考をととのえているあいだ」と彼はつぶけた。「ビングリーさんの話にもどううじゃないか」

「ビングリーさんなんか、胸が悪くなります」と妻は声をあげた。

「そう、いうことを聞くとは残念だ。だが、どうしてまえにそういってくれなかったのですか。今朝それだけのことがわかっていたら、決して彼のところに出かけてなんかゆかなかったろう。ほんとにあいにくだ。だが、たしかに訪問をしてしまった以上、いまさら交際を絶つわけにもゆかない」

婦人たちのおどろきは、まさに彼の望んだとおりだった。ベネット夫人のそれは、ほかのだれよりも大きかったであろう。もつとも彼女は、よろこびの最初の浪立ちがしずまると、わたしははじめからずっと、こうなることと予期していたと言明しだした。

「ほんとにいいことをしてくださいましたわ、あなた！でもね、わたしは、けっきょくはあなたを説きふせることができると思っていまして。娘をとてまかわいがっていらっしゃるのだから、こんなすばらしい交際をあなたがお見のがしになるなんてことはないとわかっていましたわ。そりゃ、わたしともうれしくて！それにまた、今朝いらったのに、いままで、そのことについて一言もいわないなんて、まったくおどけてますわね」

「さあ、キティ、好きなだけ咳をしてもいいよ」とベネット氏はいった。そしてそういいながら、妻の狂喜にうんざりして、部屋を出ていった。

「ほんとにすばらしいお父さまよ、ねえ！」とドアがしまったとき、

彼女はいった。「お父さまのご親切に、あなたがたがどうしてお返しするかわからないわ。あら、そういえば、わたしもよ。わたしたちの年配になると、毎日新しく人と近づきになるなどというのは、あまり愉快なものじゃないわ。でも、あなたがたのためならば、わたしはどんなことだってしてあげてよ。ねえ、リディア、あなたはいちばん年が若いけど、今度の舞踏会では、ビングリーさまがダンスの相手になってくださいるわ」

「まあ！」とリディアは勢いよくいった。「わたし怖くなんかないわ。いちばん年は若いけど、いちばん背が高いんですもの」

その夜は寝るまで、彼がどんなに早く、ベネット氏の訪問への答礼にくるかを当ててみたり、彼を食事に招くのはいつにしたらいいかをきめたりして、過ごした。

第三章

けれども、ベネット夫人は五人の娘の協力を得て、さまざまにたずねてみても、夫からビングリー氏について納得のゆく説明を引出すには充分でなかった。彼女たちは、いろいろな方法で彼を攻めてみた。臆面もなく質問を浴びせかけたり、言葉たくみに話をもちかけたり、遠まわしに探りを入れたりした。だが彼はたれの手からもすり抜けたので、彼女たちはどうとう、隣人ルーカス夫人のまた聞きの情報を受けいれるほかはなかった。夫人の報告は、じつにすばらしいものだった。サー・ウィリアム・ルーカスは、彼が大いに気に入った。ひじょうに若く、おどろくべき好男子で、まことに感じがよく、かてて加えて、今度の舞踏会にはたくさんの人を連れてくるつもりだそうだ。これ以上よろこばしいことがあるだろうか！舞踏が好きということは一歩すすめば恋におちることになるわけて、ビングリー氏の心を

とらえるという強い希望を、みなは抱きはじめた。

「もし娘たちの一人がネザフィールドで幸せに身を固めて」とベネット夫人は夫にいった。「ほかの娘たちも同じようになりつばな結婚をするのが見られさえしたら、わたしは何も望むことがありませんわ」

二、三日すると、ビンググリー氏がベネット氏の訪問への答札にきて、書斎に十分間ほどいっしょにいた。彼は、かねてから噂に聞いていた美人の令嬢たちをちらとでも見せてもらえるという希望を抱いてきたのだが、会ったのは父親だけだった。令嬢たちは、それよりいくらか運がよくて、二階の窓から、彼が青い服を着て黒い馬に乗ってきたことをたしかめるという収穫をもった。

それからまもなく、正餐の招待状が送られ、ベネット夫人が、家政のほまれを高めるべき献立の計画もおわったとき、返事がどいて、それは延期ということになった。ビンググリー氏は、つぎの日ロンドンへゆかなければならず、したがって招待の榮を心苦しくも云々、というのだった。ベネット夫人は、すっかり度を失ってしまった。ハーフォードシャにきた早々に、ロンドンにどんな用事があるのか想像してみてもできず、あの人はいつもあちこちと飛びまわっていて、かんじんのネザフィールドに落ちつくことをしないのではないかと、心配しはじめた。ルーカス夫人は、あのかたかロンドンへお出かけになったのは、舞踏会のためにたくさんの人をお連れになるためだろうと思いついて、彼女の不安を少しやわらけた。するとまもなく、ビンググリー氏は、十二人の婦人と七人の紳士とを連れてくるという報告がきた。娘たちは、そんなにたくさんさんの婦人かくるのを嘆いたが、舞踏会の前日に、ロンドンから同行してきたのは十二人ではなく六人だけで、姉妹か五人といとこが一人たと聞いて、ほんと安心した。しかも一行が会場へはいってきたとき、全部で五人だけで、ビンググリー氏、その二人の姉妹、長女の夫、それにもう一人の若い男性だった。

ビンググリー氏は好男子で紳士らしい人であった。感じのいい表情と、ほかからかえり取りのない態度とをもっていた。彼の姉妹は、洗練された女性で、寸分の隙もなく上流風であった。義兄のハースト氏は、ただ紳士と見えるだけだったが、友人のダーニー氏は、そのみことな高い体軀、秀いでた容貌、気品ある物腰、そして彼がはいってきから五分間とたたぬうちにあたりにながら、一万ポンドの年収があるという情報などによって、すぐさま一座の注意をひいた。男たちは、彼を風姿堂々たる人だといひ、婦人たちは、ビンググリー氏よりも好男子だと断言し、それでその夜の半ばごろまでは、たいへんな賛美の目でながめられたのだったが、そのうち彼の態度が不快な感じを人にあたえ、その人氣の潮は引いてしまった。というのは、彼は高慢で、一座の人々を見くひり、人々と楽しむ気などないということがわかったからだ。彼がダービンに大きな領地を持っているということをもつてしても、きわめて取っつきにくく不愉快な風貌であり、彼の友人と比べる値うちもないという事実を、どうすることもできなかった。

ビンググリー氏は、まもなく室内の主だった人々と近づきになっていた。はつらつとして人見知りせず、どの舞踏会もおどりと、舞踏会のおひらきがあまり早いと怒りもし、自分もネザフィールドで舞踏会をもよおすつもりだと語った。そういう人好きのする性質か、大いに物をいわないはずはない。彼とその友人とは何と対照的だろうか！ダーニー氏は、ハースト夫人と一度、そしてビンググリー嬢と一度踊っただけで、ほかの婦人に紹介されることを拒み、その夜はおわりまで、室の中を歩きまわっては、ときどき自分の仲間のたれかに話しかけて、時をすごした。彼の性格ははっきりとしたものだった。世界でもっとも高慢な、もっとも不愉快な人物で、もう二度ときてもらいいたくないと、だれもが思った。もっともはげしく彼に反撥したひとり、ヘネット夫人であって、だいたいから彼の振舞いが気に入らなかつたうえ

に、彼女の娘のひとりを彼が無視したので、ことさら彼を憎む心になつてしまつた。

エリザベス・ベネットは、紳士たちの数か少なかったもので、二度も、踊らずに坐つていなければならなかつた。そのときちょっとの間、ダーシー氏が、彼女のすぐ近くに立つており、そこへビンググリー氏かしはらく踊りをやめて、友人に仲間入りをすすめにきて、二人で話しているのを、彼女は耳に聞いた。

「さあ、ダーシー」と彼はいつた。「きみにどうしても踊ってもらふよ。そんなはかげた格好で、一人で立つてゐるのを見たくないんだ。踊らないなんてことはないよ」

「ごめんこうむるね。とくに親しく知り合つた相手でなければ、ぼくは踊るのはいやだつてことは、きみも知つてゐるだろう。こんな舞踏会で踊るのなんかは、耐えられないことだ。きみの姉妹たちは約束すみだし、この室の、ほかのどの女とがまんして相手をして、それはぼくにとつて責苦ではないか」

「ぼくはきみほど気むずかしくなりたくない」とビンググリーが声をとがらせた。「一国をやるといわれてもだよ！ 誓つていうが、今夜ほどたくさんのはらしいお嬢さんたちによつたことかない。それにね、そのうち数人はとびぬけてうつくしいではないか」

「きみは、この室ただ一人のきれいな娘と踊つてゐるのた」と長女のベネット嬢を見ながら、ダーシー氏はいつた。

「ああ、あんな美人に、ぼくはいままでに出会つたことがない！ でも、妹のひとりがいて、きみのすぐうしろに坐つてゐるが、とてもきれいだし、とても感じがよさそうだ。ぼくの相手に頼んで、きみを紹介してもらおうか」

「どれをいつてゐるのか」と振りむきながら、彼は一瞬エリザベスを見たが、やがて彼女の視線にあうと、自分の目をそらして冷然といつ

た。「まずまずだ。だか、ぼくの氣を、そるほど美しくはない。それにぼくはいまのところ、ほかの男たちに無視されてゐる若い娘さんの評価を高めてやる氣もしないのだ。きみはきみの相手のところへもどつて、その人の微笑でも楽しむがいい。ぼくにまかつてゐては時間のむたというものだから」

ビンググリー氏は、彼の忠告にしたがつた。ダーシー氏は、行つてしまつた。そして残つたエリザベスは、彼にたいしてあまり温かい感情を持たつたとはいへなかつた。しかし彼女は、友人たちのあいだに、じつに朗かにその話をふりまいた。というのは、彼女の快活でいたずらっぽいところのある氣質は、滑稽なことが大好きだつたからである。

その夜は、家族全員にとつてまったく楽しくすきて行つた。ベネット夫人は、長女カネザフィールドの人たちに好感をもつて迎えられてゐるのを見た。ビンググリー氏は、彼女と二度もおどり、彼の姉妹は彼女を特別に遇した。ジェインは、このことに母親としくらいに、もつとも、もつとひそやかにたつたが、よろこんだ。エリザベスは、ジェインのよろこびを感じとつた。メアリは、自分かこの近辺でいけばん教養のある娘た、とだれかがビンググリー嬢にいつてゐるのを耳にした。そしてキャスリンとリディアとは、幸運にも舞踏の相手にこと欠かなかつたが、彼女たちは舞踏会では、それたけのことを考えるだけで心はいっぱいいたつた。たからみなは、快活な気分分、自分たちが住んでおり、その主たつた住民でもあるところの村、ロングボーンへ歸つた。歸つてみると、ベネット氏はまだ起きていた。本を読んでゐると、時間など忘れてしまふのだつた。それにこの場合、あんなにもはなばなしく期待をいだかせた夜会の結果に、大いに好奇心をもつてゐた。じつところ、あの未知の男にたいする妻の期待が、すっかりはずれてくれればと思つてゐた。ところが、全然べつな話を聞かされる羽目になつたのである。

「まあ、あなた」と部屋へはいるなり「ほんとうに楽しい晩でしたわ、とてもすばらしい舞踏会でしたわ。あなたもいらっしやればよかったのに。ジェインが、それはそれは、いいようもないほどの人気でした。なんときれいなんでしょうと、だれもおっしゃいましたよ。そしてビングリーさまも、あの娘をとても美しいと思ったのでしょう、二度も踊りましたわ。まあ考えてもごらんさいよ、あなた。あのかた、ほんとうに二度も相手を作ったのよ。そして、二度も申しこまれたのは、あそこではあの娘だけでした。まず最初に、あのかた、ルーカスのお嬢さんに申しこみました。彼女と踊っていらっしやるのを見ると、わたししゃくにさわったわ。でも、あのかた、彼女にはちっとも感心しなかったのですよ。だって、だれだって感心できませんよ。それであのかた、ジェインがそれからそれへと踊りをこなしてゆくのをごらんになって、すっかりおどろいた様子でしたわ。そこで、あれはだれかとたずねて、紹介されると、つぎの二回を申しこんだのですわ。それから、三度目の組曲をキングさんと踊り、四回目はマライア・ルーカスと、五回目にはまたジェインと、六回目はリジーと踊り、ブルーランジェ踊りは――」

「ビングリーさんか、このわたしに少しでも思いやりをもっていたのなら」と夫はしれったそうにさげんだ。「その半分も踊りはしなかったろうに！ 後生だから、踊りの相手のことは、もうよしておくれ。一回目の踊りで足首でもくじてくれたらよかったのに！」

「まあ、何をおっしゃるの」とベネット夫人はつつけた。「わたし、あのかたはすてきだと思いますよ。おどろくほど好男子ですわ！ それに姉妹のかたも、人好きのするひとたちですよ。あのかたたちの衣裳ほど優雅なものを、わたしは今までに見たことはありませんわ。ところでハーストの奥さんのガウンのレースは、――」

ここでまた、彼女はさええきられた。ベネット氏か、衣裳の説明はも

うたくさんだといったのだ。それでほかの話題をさがさなければならなくなり、ダーシー氏はむかつくほど無作法だったことを、かなりの遺恨をこめて、またいくぶん誇張して話した。

「でも、保証しますわ」と彼女はつけくわえた。「あの人の好みに合わないからって、リジーは大して損をしなかったのですわ。とても不愉快な、おそろしい人で、あんな人に気に入られたって始まりません。それに高ふつてうぬぼれが強いときてるのですから、どうにもがまんかならないのよ！ 自分はどうともえらいんだと思いながら、あつちを歩いたり、こつちを歩いたりして！ 相手になって踊りたいほどの好男子でもなし！ ねえ、あなたがいっしょについて、例の調子でやりこめてくださったらよかったのに。わたしはあんな人を軽蔑しますわ」

第四章

ジェインとエリザベスと二人だけになったとき、いままでビングリー氏を賞めることを慎んでいたジェインは、自分は彼をどんなに慕っているか、心のうちを妹にのべた。

「あのかた、若い男性の典型というべきだわ」と彼女はいった。「気がよくついて、明るくて、快活で。あんなりっぱな態度は見たことがないわ！ あんなに世馴れしていらして、そして品格があつて！」

「それに好男子よ」とエリザベスカこたえた。「青年はできることなら、同時に好男子であるべきだわ。あのかたのお人柄は、それで完全よ」

「二度目に踊りを申しこまれたとき、わたしそれはもう得意だったわ。そんな光栄は予期してもいなかったの」

「予期していなかったの？ わたしは、あなたのために予期していた

わ。でも、そこがわたしたちの大きな相違点ね。光栄は、いつでもあなたには不意打ちなのだけど、わたしには、そんなことはけつてないわ。あのかたが二度も申しこんだことくらい、当然のことはないじゃないの。あのかたも、あの場のほかのどの女の人よりも、あなたが五倍くらいきれいだと思わずにはいられなかったのよ。そのために、あのかたの騎士ぶりをありがたがることはないわ。そうね、たしかにあのかたとても感じがいいわね。あのかたを好きになってもよろしいって、許可してあげてよ。もっとばかな人を、あなたはたくさん好きになったんですもの」

「まあ、リジー！」

「あら、あなたって人は、だれだっておかまいなしに好きになることが、多すぎるのじゃなくて？ 人の欠点なんか見ないんですもの。あなたから見れば、世間の人はみな、善良で好感が持てるのだわ。いままでに、あなたが人の悪口をいうのを、わたし聞いたことがないわ」

「わたし、早まって人をとがめるようなことはしたくはないわ。でも、いつも自分の思ったことは言います」

「それはわかっています。不思議なのは、その、どこ、なの。あなた、どの見識がありながら、人のふしだらやでたらめがまったく見えないうんて！ 見せかけの善意は、ごくありふれたもので——どこへいったってお目にかかるわ。でも、見栄も下心もなくても善意——すべての人の性格のよい点をとって、それをなおいそうよくして、悪い点については何もいわない——これは、あなただけに限ったものよ。ですから、あなたはあのかたの姉妹も好きでしょう、ねえ？ 彼女たちの身だしなみは、あのかたのと同じじゃないけど」

「一見すると、たしかにそうだわ。でもお話してみると、とても好きになれるかたちだわ。ピングリー嬢は、お兄さまといっしょに暮して、家のきりもりをなさるんですって。あのかたがとてもすばらしい

隣人にならないなんて、考えられないことよ」

エリザベスはだまって聞いていたが、納得はゆかなかった。舞踏会でのピングリー姉妹の振舞いからは、人々に親しまれようというような心は感じられなかった。エリザベスは、姉より観察が鋭敏で、きかぬ気の強いたちで、人からちやほやされても曲げることを知らぬ判断力の持主だったから、あの姉妹を認めようとは思わなかった。彼女たちは、たしかにすばらしい女性である。お気に召したときには、ほかからにもなるし、しようと思えば愛想よくすることもできる、だが、高慢でうぬづれが強い。どちらかといえうつくしいし、ロンドンの一流の私塾で教育を受けており、二万ポンドの財産もあり、つねに不相応なほどの金使いをし、位階の高い人々と交わっているのでもある。それだから、あらゆる点で、自分たちをすぐれたものと感じ、他人をさげすむ資格がある。イングラント北部の名家の出で、その事実のほうが、兄と自分たちとの財産が、商業によって得られたものだということよりも、彼女たちの心に強くきざみこまれているのである。

ピングリー氏は、父からかれこれ十萬ポンドの額にのぼる財産を受けついでいた。その父は土地を入手するつもりでいたが、その機を得ないままに亡くなった。ピングリー氏も同じ意図をもち、どの州にするか選択してみることもときどきあった。しかしいま、りっぱな家にはいり、それには、狩猟権もついているのだから、あくせくしない彼の気性をよく知っている人々の多くには、彼がこれから死ぬまでの日をネザフィールドで送りながらも、土地購入のことはつぎの世代にまかせようなことにならぬとも限らぬ、と推測するのであった。

彼の姉妹たちは、彼が自分の土地を持つことをしきりに望んでいた。しかし、たとえば彼がいまわずかに借地人として定着しただけであるとしても、ピングリー嬢は、食卓の主婦のつとめをするのをけつしていやがってはいなかった。また資産家というよりは社交界の人に嫁

いであハースト夫人も、自分に好都合のばあいには、弟の家をわが家と考えたがっている点では、妹におとらなかつた。ピングリー氏が、たまたま人にすすめられてネザフィールド莊を見る氣になったのは、成年になって二年とたつていないときだつた。半時間はかりその莊の内外を見るには見て、その環境や主要な諸室が氣に入り、所有者の自贊のことばによつて乘氣になり、すぐさまそれを借り受けた。彼とダーシーとのあいだには、性格がまったく正反對であるにもかかわらず、ひじょうに固い友情が結ばれていた。ピングリーは、のんびりした、あけつびろげな、人に逆らえぬ氣性で、ダーシーに愛されてゐた。しかし、それらのもののほど、ダーシー自身の性情から遠くかけはなれたものではなく、そしてまたダーシーはけつして自分の性情に不満を抱いてゐたのではない、といつておくべきではあろう。自分たしするダーシーの親愛の深さに、ピングリーは強く寄りかかつており、その判断力をこのうえなく尊重してゐた。知力の点では、ダーシーがすぐれていた。ピングリーも知力に欠けてはいなかつたが、ダーシーは鋭利だつた。同時に彼は、氣位が高く、無口で、氣むずかしく、育ちのいいしなみを持ちながら、人を寄せつけぬようなところがあつた。この点では、彼の友人のほうは、大きく優越してゐた。ピングリーはどこへいっても、まちがひなく、人に好かれた。ダーシーは、しじゅう人の氣分をきずつけてゐた。

彼らのメリトンの舞踏会についての話しふりは、彼らの特徴をあらわしてあますところがない。ピングリーは、いままでにあれほど愉快な人たちや、きれいな娘たちに会つたことはないといひ、またたれもがひじょうに親切に心をこめて扱つてくれ、形式はつたところも固苦しさも全然なく、彼はすぐに一座の人みな親友になつたように感じ、そしてベネット嬢についていえば、あんなに美しい天使は考えられない、といった。ダーシーはその反對に、美しさなどほとんどなく、こ

れつぱちの高尚さも見られない人々の集まりを見ただけで、彼らのだれ一人にもいささかの興味も湧かず、だれの心尽しも受けず、よろこびもあたえられなかつたという。ベネット嬢がきれいなことはたしかだが、あまりに、にこやかすぎる。

ハースト夫人と妹とは、そうたとみとめたが——それでも、彼女を賞め、彼女が氣にいり、愛すべき娘だから、もつとよく知り合つてもべつに異存はない、と言明した。それでベネット嬢が、愛すべき娘だといふことは確立したのであり、ピングリーは、そのような推挙を得たのだから、これから彼女にどんな思ひを寄せてもいいと考えるのだつた。

第五章

ロングボーンから少しばかり歩いたところに、ベネット家がどくに懇意にしている家族が住んでゐた。サー・ウィリアム・ルーカスは、昔はメリドンで商業に従事してゐたが、そこでかなりの財産をこしらへ、市長をつとめている間に、国王に請願して騎士の爵位に叙せられてゐた。その殊遇にあまりにも強く感激したのであろう。商業をつづけ、小さな市場町に住むのに嫌惡を感じるようになり、それらをともどもに捨て、メリトンから一マイルばかりはなれ、その時からルーカス莊と名づけられることになつた家に、家族とともに引き移り、そこで彼は、自分の社会的地位を心ゆくまで味わひ、商業の束縛からはなれ、ひたすら世のすべての人に折目正しく振舞うことがてきることになつた。高きにのぼつたことに得意は感じてゐたが、人を見くだすようなことはなかつた。それどころか、だれにも親切そのものだつた。生まれながらに人づきがよく、親しみやすく、世話好きであつたのだが、セント・ジェイムス宮殿で拝謁をたまわつてからは、高尚典

雅な人物とすらなっていた。

ルーカス夫人は、ごく善良な婦人で、ベネット夫人の頼もしい隣人となるには才気がありすぎて困るというほどでもなかった。夫妻には、子供が数人あった。長女は、氣たてのいい聡明な二十七歳くらいの娘で、エリザベスの親友だった。

ルーカス家の姉妹とベネット家の姉妹とか、会って舞踏会について語り合うことは、何をおいても絶対の必要事であった。それで集まりのあった翌朝、ルーカス家の姉妹はロングボーンへ、聞きも語りもしに、でかけた。

「あなた、昨夜はみごとなすべり出しでしたわね、シャーロット」とベネット夫人は礼節上自己をおさえて、ルーカス嬢にいった。「あなた、かでしたもの、ピングリーさまか最初におえらびになったのは」

「はい——でもあのかた、二度目のお相手のほうがお好きなようでしたわ」

「まあ、——それはジェインのことなんでしょう。——あの娘と二度もお踊りになったのですから。だから、あのかた、あの娘が**お氣に**いったように見えましたわね——まあ、いつてみれば、わたしにはそういう感じなんですけど——そういうたことで何だか耳に入ったこともあるようですけど——何のことかわからないんですのよ——何かロビンソンさんのことでしたっけ」

「あのかたとロビンソンさんとの話をわたしが立ち聞きしたことを、おっしゃってるのでしょうか。わたし、そのことをお話ししませんでしたかしら。ロビンソンさんかあのかたに、このメリトンの舞踏会はどうですか、室内に美人があふれているとは思いませんか、いちばん美しいのはどのひどですか、とたずねると、あのかたは最後の質問にすぐさま、『まちがいないところベネット家の長女ですね。その点については、意見が二通りあるはずはないでしょうね』というお答えで

したわね」

「まあ、そうなの！ なるほど、もう、はつきりしましたわね——それでは、多分——でも、しかし、けっきょくは何でもなかった、つてことになるかもしれませんものね」

「わたしの立ち聞きのほうが、あなたの立ち聞きよりもほど氣が利いていたわね、イライザ（エリザベスの愛称である）」とシャーロットがいった。ダーシーさまのいうことなんか、お友たちのピングリーさまのほど、聞く値うちはないんじゃないかと。イライザがかわいそうだわ！ たたまますすところなんて」

「そんなことをリジーの頭に入れて、あの人の無作法にくさくささせるのは、よしていただきたいますわ。あれはほんとに不愉快な人で、あんな人に好かれたりすることこそ不運というものですよ。昨夜ロングの奥さまから聞いたのですけど、三十分もすぐそばに掛けているのに、口ひとつきかなかったそうですよ」

「それはたしかなの、お母さま？ 少しちかうんじゃありませんこと？」とジェインがいった。「わたししたきに、ダーシーさまがあ**の奥さまに話して**いらっしゃるのを見ましてよ」

「そうね。でもそれは、彼女がどうとう、ネザフィールドはどうですかとたずねたので、答えないわけにゆかなかったからたわ。だけど、話しかけられてあの人だい**お腹を立てた**ようだったそうよ」

「ピングリー嬢がおっしゃってました」とジェインがいった。「あのかた、親しい知り合いの聞てないと、あまり口をおききにならないんですつて。そこではたいへん愛想かいいそうよ」

「そんなこと一言だって信じられないわ、ジェイン。もしそんなにひどく愛想がいいのなら、ロングの奥さまに話しかけたでしょう。わたしには、察しがつくわ。あ**の人は誇りという病**いに取りつかれてしまっているつて、だれもがいつています。それで、ロングさまのお宅に